《書　評》

月本昭男 著
『物語としての旧約聖書（上）　人間とは何か』
『物語としての旧約聖書（下）　いかに生きるか』

NHK 出版、初版、2018 年

橘　　耕太
TACHIBANA Kota

本書は、NHK ラジオ「宗教の時間」にて、2018 年 4 月から 2019 年 3 月の一年間にわたり月に一度放送された、書名と同名の講座のテキスト・ブックである。全体の構成は上下巻全 12 章からなり、各章はそれぞれ「第何回」と表記されている。著者である月本昭男（上智大学特任教授、古代オリエント博物館館長、立教大学名誉教授）は、オリエント学の専門家としての活動と並んで、旧約聖書に関する多くの入門書・概説書を執筆監修しており、本書もその列に新たに加わるものである。

各章は、基本的に旧約聖書のヘブライ語原典の配列（上巻 9 頁に配列表あり）に沿って、並べられている。上巻では創世記を取り上げ（第一回から第四回はその冒頭部にあたる「原初史」、第五回と第六回はアブラハムとその子孫の物語）、下巻はそれ以降の物語から（第七回では出エジプト記、第八回と第九回は「前の預言書」、第十回と第十一回は「後の預言書」、第十二回は「諸書」）、それぞれ特徴的なエピソードが取り上げられている。

『旧約聖書』と呼ばれる文書群に対して本書は、一貫した命題から論じている。それは、上下巻の副題にも表されているように、「人間とは何か」と「いかに生きるべきか」という二つの問いである。これらの相互に関連する問いについて、さまざまな資料を引き合いに出しつつ挑もうとしている。

上巻『人間とは何か』第一回「天地創造　人間と自然の調和を願って」で

は、創世記の冒頭部、七日間の天地創造物語が取り上げられる。古代西アジアの類似した創造神話との比較を通して、この物語は、神々の抗争といった神話的な物語要素を排除した上で、言葉によって秩序が造り出されたとする点が特徴的とされる。さらに、「神の似姿」としての人間平等主義や、自然を「支配する」と同時にそれに「仕える」人間という、神を介した形での人間と自然の調和を願う姿勢についても指摘される。

第二回「エデンの園　人は塵から造られ塵に帰る」では、アダムとエバの物語が紹介される。そしてその物語には、人間はあくまで大地の塵にすぎないという旧約聖書の基本的な人間観と、それでもそのような人間を顧みてくれる存在としての神、および親子関係に優先される夫と妻の関係といったメッセージ、そして「善と悪を知る木」の実を食べることによって神になろうとする人間の高慢さへの批判と知恵への皮肉があることが、明らかにされる。

第三回「カインの末裔　都市文明への批判的視座」は、カインとアベルの物語を扱う。両者に対する神の扱いの不条理から、著者は、兄弟間の確執、および農耕と牧羊の関係という主題を引き出す。後者の主題に関しては、異なる生活形態とそのあいだの移行を、実際の古代イスラエルの社会の変化を反映したものとする。また、バベルの塔の物語に関して、塔が象徴する大都市と中央集権国家への批判、およびそこにある人間の傲慢さへの批判を指摘する。

第四回「大洪水　物語の現代的意味」では、ノアの大洪水の物語が取り上げられる。まず、大洪水に先立つネフィリムの物語から、大洪水の原因が男女関係の乱れにあると同時に、そこにはエルサレムの王宮批判が含まれていることを示す。そして、大洪水は世界秩序の転覆であり、その後の世界は新たに創造された世界であることが指摘される。同時に、古代の洪水神話との比較において、その物語には唯一神の存在と倫理的な観点からの洪水物語の語り直しという特色が見られるとされる。

第五回「アブラハム　おそれとおののきのなかで」では、「原初史」につづくイスラエルの父祖たちの物語について語られる。ここでは、アブラハム

の物語を中心にしつつ、父祖たちが、決して読者の模範にはならないような人間的な弱さや醜さをあらわにしつつも、神の約束と導き（「アブラハムの契約」）に支えられた人物として提示されているとする。

第六回「ヤコブとその子ら　目に見えない神の摂理」では、ヤコブとその子ヨセフの物語が取り上げられる。とりわけヨセフの物語が、「原初史」や彼以前の父祖たちの物語と比較される。その結果、ヨセフ物語では神の介入が抑制され、神が出来事の背後に退き、むしろ人間的な感情や行動によって事態が進行することが指摘される。しかし、そこには、目には見えない神の摂理がつねに働いているという信仰を示す意図がある、と結論づけられている。

下巻『いかに生きるか』第七回「出エジプト　苦境からの解放」では、「出エジプト」の物語が、イスラエルの「民」の歴史の起点であり、同時にその「信仰」の原点を伝える民族伝承であることが述べられる。過越祭と選民思想が、この出来事によって基礎づけられている。また、出エジプトにつづいてモーセが神から受け取った「モーセの律法」では、社会的弱者に対する保護規定が王の正義の誇示ではなく、民の義務とされている点、また弱者の代表として、孤児と寡婦と並んで「寄留者」が含まれる点が特徴的であると指摘される。

第八回「カナン定住　嗣業の地の配分」では、モーセ後の世代によるカナンの征服について語るヨシュア記と士師記が取り上げられる。ヨシュア記がカナンを神がかつて約束した嗣業の地とし、その獲得を神の「み業」に帰したのに対し、士師記が弱さを抱える生身の人間である士師たちの物語であることが、急速な征服とゆっくりとした浸透という、カナン獲得の仕方における両書の記述の相違を導いたとする。しかし、同時に両書が、律法を介した因果応報思想を民族の歴史にあてはめるという、共通した歴史観を持つことを指摘している。

第九回「ダビデとその後　翻弄される王国」は、ダビデ王朝の成立の経緯と、それを始点とする王国時代の終わりまでを扱う。そして、これらの物語を記す歴史書の最後にあたる列王記について、因果応報思想に基づく歴史理

解、「ダビデ契約」（ダビデ王朝永続の約束）の想起、ある出来事を預言の成就とみなす歴史理解といった特徴が見られるとする。

第十回「預言者の言葉　時代批判と将来への希望」は、預言書に記録される預言者たちがそれぞれ、さまざまな時代背景や出自を持ちつつも、共通の基盤に立っていたことを示す。それは、徹底した神ヤハウェへの信仰とそれに基づく明確な倫理観である。さらに、預言者に共通するより具体的なものとして、召命体験と象徴行動、および社会・政治・宗教の現状に対する批判があるとされる。また、預言者たちが理想の時代の到来の告知という、希望の預言を行ったことも指摘する。

第十一回「預言者群像　その素顔と個性」では、預言者たちに共通する要素を取り上げた前章に対して、各預言書を個別に取り上げ、それぞれの特色について説明する。ここでは、王国時代の後半からバビロニア捕囚、そこからの帰還、およびエルサレム神殿の再建とその後の神殿体制に至る時期に活躍した預言者たちが、その活動の時代順に並べられている。

最後の章である、第十二回「小さき者たちの神　多様性と逆説性」では、旧約聖書の最後を飾る「諸書」について扱う。そこには、さまざまな思想や文学形態を持つ書物が含まれ、時には自民族中心主義とそれを超える普遍的思考という、二つの相互に矛盾する思想が併存する場合もあることが指摘される。一方で、唯一神ヤハウェへの信仰が各書の共通の基盤にあることが確認され、その全世界的で普遍的な神がイスラエルという社会的弱者を選んだ、という逆説的な性格が最後に示されている。

旧約聖書を形成する文書群は、そこに含まれる思想も、それを表現する文学形式もさまざまである。本書は、その文書群全体を時に個別に、時にあるまとまりをもって、そして時に総体的に、扱っている。同時に、それを行うアプローチもまた、多岐にわたる。テキスト内世界のみに着目することもあれば、当時の時代背景ないし社会と結びつけるときもある。古代西アジアやギリシア・ローマ世界の諸文書との比較がなされることもある。そして、時に文学論における類型や考古学的な見地が引き合いに出されることもある。

テキストを眺める視点もまた、単一ではない。著者は、いく度もテキストの編集作業に言及する。記述されているエピソードの時間軸に沿って各書物を並べているのに、その成立年代を話題にするときもある。テキストそのものに見出される歴史観を取り出すこともあれば、そこに編み込まれている「当時の」人々の思想に思いをはせることもある。一方で、ほとんど言及されていないにもかかわらず、旧約聖書の現代的意義を意識していることは明らかである（それは、下巻 33 頁注に引用される、ヴァイツゼッカーの言葉に象徴されているように思われる）。このようなさまざまなレベルにおける視点の多様性を、一貫性がないと批判することはたやすい。しかしながら、この複眼的多層的な視点が、本書が提示しようとした包括的な旧約聖書観の確立に寄与していることは、疑いようがないであろう。

この複眼的多層的な視点は、じつはそれぞれの有機的な結びつきを必ずしも示してはいない。それを成立させているのは、ひとえに「人間とは何か」という命題が、一つの軸を本書に通しているからである。それゆえ本書は、この命題から読まれるべきである。しかし、ここで問われている「人間」とは、そもそも何であるのか。「人間的」という表現やそれにたびたび付随する「弱さ」とは、何を指しているのか。そのことは、本書では触れられていない。著者は、この包括的な視点に関するわたしたちに共通する事柄を自明のこととして前提しているようにも感じられる。しかしながら、少なくとも評者には、このことは自明でなく、それを問うことが「人間とは何か」という問いに取り組むにあたり非常に重要であるように思われる。さらには、それを問わないままに「いかに生きるか」と問うことは、それに対する著者個人の見解をただ拡大し、一般化してしまう危険性をつねに伴うこととなる。本書において著者が立て、おそらくなんらかの答えを示したであろう問いは、それとまったく同じ問いを、もちろん異なるレベルで、提示するのである。

（本学大学院キリスト教学研究科キリスト教学専攻博士課程後期課程）